

6 岡山で蘭方を教えた吉雄永清

中山 沃

備前和気郡伊部村(現・備前市)の医師、佐藤陶崖(一七五―一八四三)は文化七年(一八一〇)二六歳の時、播州室津の漢方医名村金水の塾に入門し、特に腹候術を研鑽した。文化一〇年十月十六日、江戸から長崎に下る途中の蘭方医吉雄永清が室津に着き、しばらく滞在したのち同月晦日岡山城下に到着し、数ヶ月逗留した。陶崖は室津で吉雄永清に面会したのち、岡山城下に赴き、束修を投じて入門、三ヶ月余蘭方を学んだ。そしてその教授内容を一冊子に輯録し、「紅毛外科要訣」と名付けた。これは「陶崖備忘」と題した冊子の中に記されている。この備忘録の先ず最初に自序(漢文、一行十六字、二十行)が記されている。この自序の文頭から次のように書かれている。

「崎陽吉雄先生、名ハ永清、字ハ幸作、耕牛ノ長子ナリ、

先生弱冠ニシテ故有リ漂泊シテ東都ニ往キ医ヲ以テ業ト為ス、今年癸酉冬偶崎陽ニ下ラント欲シ、十月既望(陰曆十六日)行途駕ヲ西播室港ニ脱ス、時ニ予、室港ニ遊ビ暢襟樓ニ邂逅シ、先生ニ調スルヲ得タリ、同月晦日吾ガ藩ニ至ルナリ云々」。そしてこの末尾に、「文化癸酉(一〇)冬一二月望日書岡城寓屋西窓下 暢襟樓晩生 佐藤睦識」と記されている。

佐藤陶崖が五〇歳の天保五年(一八三四)に著述を完了した「日本医蘇」(上・中・下の三巻、腹候の二八術について論述)の中で、陶崖が岡山で吉雄永清に師事したとき永清先生は満六〇歳で、自分は二九歳であったと記している。

この吉雄永清の名は、従来知られている吉雄耕牛(二七二四―一八〇〇)の子弟の中には見いだされない人物である。通説では、耕牛には上から、献作(永久)・定之助(永貴)・権之助(永保)の三人の男子のほかに、男子二人、女子三人の子供がいた。長男献作は文政八年(一八二五)七月に五六歳で亡くなっている。定之助は佐藤家の養子となるが、のちに復籍し、寛政五年(二七九二)長崎を処

払い、文化元年(一八〇四)赦免されるが、生没年月日は不明である。妾腹の子、権之助は天保二年(一八三一)五月、四七歳で亡くなっている。文化一〇年(一八一三)末には永清は満六〇歳と陶崖が記しているので、宝暦三年(一七五三)生まれで、耕牛三〇歳の時の子である。嫡出長子の献作は明和六年(一七六九)の生まれであるから永清は献作より一六歳年上ということになる。以上のことから、永清は第一番目の夫人(あるいは家女房)の子と推察される。耕牛は、名は永章、通称は初め定次郎、ついで幸左右衛門、のちに幸作と名乗り、耕牛は号である。永清の字を幸作としたのは耕牛が自分の字を襲名させたのであろう。

「紅毛外科要訣」の本文の中に、「先生は紅毛国の良医メイストルチウンベルの門人にして、本朝始めてアルムテリアカの方を授く也」の記述がある。チウンベルとは、安永四年(一七七五)八月長崎に来航、同六年十月長崎を去ったスエーデンの医学者、植物学者のツウンベリ(THUNBERG)を指すのであろう。彼が来航した年に永清が入門したとすれば、永清が二三歳の時となる。

その他陶崖が永清の下で筆記したものに、「吉雄先生訳、紅毛流水薬方函」、「崎陽吉雄幸作永清訳、阿蘭陀アボテイキ之和解」、「ファデルメデセル」(文化十稔癸酉冬十一月侍坐於吉雄先生岡城偶居膝下写之)などがある。また陶崖常用の薬箱の横四面に、DRAAK(竜)・KAMEL(うぐだ)・PANTHER(ふよう)・INDIANS・HAAN(雄鶏)・SCHILDPAD(亀)などのほかに、AERD・LOND・EEN・MORD・MIO・ZUGT・VIERKNTなど意味不明の語が書かれている。

以上の諸資料について報告し、会員諸賢のご批判を賜りたい。なおこれら資料の閲覧を許可くださった備前市佐藤家および資料発掘に貢献された吉崎一弘氏(和気の医療史編集委員)に対し深謝致します。